

英語とインターネット

第1章～第3章 中山 順子、宮増フラミニア
第4章 宮尾真理子

English and the Internet

Chapters 1-3 Yoriko NAKAYAMA & Flaminia MIYAMASU
Chapter 4 Mariko MIYAO

Abstract

Eighty percent of Internet communication has until now been conducted in English. In this paper, we first examine the position of English as a world language as well as the history of the Internet to explain how English came to be the dominant language of the world's computers. We then look to the future and consider the implications for the English language as a new "Internet English" evolves. We also raise questions as to whether or not English will continue in its dominant position. In the final section of the paper, we analyze the characteristics of Internet English and present some examples.

キーワード 世界語としての英語、インターネットでの英語の優位性、インターネット英語

筑波女子大学短期大学部情報処理科は、茨城県より、文部省が推進している生涯教育の一貫として、1998年度の有職女性対象情報関連講座の開講を委託された。情報処理科教員全員で10回の講座を同年6月下旬より、10月中旬まで行った。筆者らは、情報処理科で英語を担当しており、コンピュータや情報処理の専門家ではない。しかし、世界的規模のコミュニケーション手段としてのインターネットは、日常利用していること、コンピュータを利用した情報の入手・発信は、当初は英語で始まったことなどから、英語とインターネットとの関係、インターネット利用言語としての英語の現状や将来について、講座の一端を担当することとなった。

本篇は、この共同作業をもとに執筆したものである。

講座名：ウイメンズ・ライフロング・カレッジ
開講期間：平成10年6月27日～10月17日

受講者数：50名
開催日時：土曜日 午後一回3時間

はじめに

インターネットが日本でブームになりはじめたのは1994年頃からである。筑波女子大学短期大学部情報処理科の全コンピュータ(学生用、教員用ともに)が、インターネットに接続されたのは、1995年である。当時は、WWWのブラウザのNetscapeのメニューは英語であった。現在は、日本語のサーチエンジンも日本語のホームページも沢山あり、かなりの情報を日本語によって入手することが可能になっている。しかし、次の例に見るように、日本国内だけでなく、出来るだけ広範囲から情報を入手する。あるいは、自分の考え、研究、自国の文化、産業、政治、等々を、広く世界の人々に知ってもらふ。また、それらに対する反応、意見を求める。このようなときには、世界の共通語といわれる英語によらざるを得ないのが現状である。

Reader's Digest の1998年2月号¹⁾に、インターネットにより1女性の生命が救われた実話が紹介されている。フィンランド、ヘルシンキ近郊にある大学の図書館で夜遅く、研究のためインターネットで情報検索をしていた20歳的女子学生が、突然持病の発作に襲われ、半身麻痺で助けを呼びに行くこともできず、呼吸困難も始まりだした。インターネットで、以前何回か英語の勉強のために、覗いたことのあるアメリカのチャット・ページを思い出して、英語で助けを求めるメッセージを送った。約1100kmも離れたアメリカ、テキサス州の町で、学校から帰宅してすぐパソコンに向かった12歳の少年が、同じチャット・ページを見ていて、彼女のメッセージに気付くが、はじめは、悪ふざけと信じなかった。しかし、何回かのやりとりで事態の緊急性を察し、地元の保安官事務所へ連絡する。さまざまな経緯を経て、最終的には、彼女の地元の救急センターに通報でき、彼女は一命を取り止めた

のである。これは、インターネットを英語で利用したことにより、コミュニケーションが成立したよい例である。

次に、インターネットで、外国から専門的な情報を、英語により入手した例をあげる。1998年春頃、筆者の一人がたまたまラジオ放送で耳にしたことである。長期治療を必要とする人が、その病気に日本でよく使われる薬の投与を受けていたが、長期使用による望ましくない副作用を心配していた。幸い、彼の主治医が、インターネットで医学情報を見ていて、アメリカにそのような副作用のない薬ができていることを知り、以来その薬によって、副作用の心配なく療養を続けているとインタビューに答えていた。

これらの例は、英語を使用することによって、インターネットで、国境を越えて、コミュニケーションを成立させることができ、また、多様な情報を、手に入れられるということを示している。

本稿では、世界語あるいは国際語といわれる英語が何故そう呼ばれるのか、インターネットで使用される言語の一つのとしての英語の位置付けはどのようなものか、インターネットの発展にともない、英語は影響を受けるであろうか、に関して、第1～3章でとりあげ、第4章では、インターネット・コミュニケーションの中で最も便利で、かつ頻繁に行なわれている電子メール(e-mail)を中心にインターネット英語の特徴についての検討を行なう。

第1章 インターネットで使用される言語としての英語の位置付け

1 世界の言語の中の英語

デイビッド・クリスタル²⁾によれば、第1表にみるように、英語を母語（第1言語）とする人口は、世界で2番目に多いが、その人口は中国語母語人口のわずか3分の1である。しかし、第1表によれば、英語を公用語とする人口は、英語を母語とする人口の3倍以上となり、中国語とその順位が逆転して、公用語としての中国語話者をはるかに凌いでいる。

第1表の公用語話者の上位の言語について、地域的な面から検討して見る。国によっては、カナダが、英語とフランス語を、また、インドが、ヒンディー語と英語を公用語としているように二つ以上の言語を公用語としている国も少なくない。

公用語話者数が第1位の英語は、北米大陸

のアメリカ合衆国、カナダは当然ながら、ヨーロッパのイギリス、アイルランド、マルタ、アフリカ大陸のケニア、ウガンダ、ガーナなど、オセアニアのオーストラリア、ニュージーランドなど島嶼国、アジアでは、インド、フィリピン、シンガポールなどで公用語とされている。すなわち、英語を公用語としている国々は、地域的には全世界に広がっていることが分かる。第2位の中国語を公用語としている国は、中華人民共和国、台湾、シンガポール、マレーシアなどアジアに限定されている。第3位のヒンディー語はインドを中心として、やはりアジアに限られている。第4位のスペイン語は、スペインとアフリカの赤道ギニア以外には、メキシコ、アルゼンチン、ペルーなどのある中南米に限定されている³⁾。即ち、英語は公用語として採用されている国が世界に広がっているが、他の上位の

第1表 世界の上位10言語の話者の概数

(単位：100人)

	母語話者	100万人	公用語話者	100万人
1	中国語	1000	英語	1400
2	英語	350	中国語	1000
3	スペイン語	250	ヒンディー語	700
4	ヒンディー語	200	スペイン語	280
5	アラビア語	150	ロシア語	270
6	ベルガル語	150	フランス語	220
7	ロシア語	150	アラビア語	170
8	ポルトガル語	135	ポルトガル語	160
9	日本語	120	マレー語	160
10	ドイツ語	100	ベルガル語	150
11	フランス語	70	日本語	120
12	パンジャブ語	70	ドイツ語	100
13	ジャワ語	70	ウルドゥー語	85
14	ビハーリー語	65	イタリア語	60
15	イタリア語	60	朝鮮語	60

(2) デイビッド・クリスタル著／風間喜代三・長谷川欽佑訳．言語学百科辞典大館．1992．(413頁より)

言語は、地域的に限定された地域でしか公用語として採用されていない。

以上みたように、公用語話者の数からみても、公用語として採用している国の地域的広がりから見ても、英語は世界語といえる。

英語が公用語として世界一の地位を占めているということは、国際的なコミュニケーションの場で、優位にあることを示していると考えてよい。国際的な会議では、英語は共通の言語である。国際連合の公用語の一つであり、ここでのコミュニケーションのおよそ90%は英語で行われているといわれている¹⁾。社会の多様な面での世界的な交流の増加にともない、世界の共通語としての英語の役割は増しこそすれ、低下することはないようである。

2 インターネットで使用される言語としての英語

英語は、インターネットでどの程度使用されているのであろうか。はたして、英語は、インターネットで最も多く使用されている言語であるのか。

インターネットの利用に関しては、ネット関係の企業が、単独或いは共同で、或いは、大学と企業が共同で種々の調査を行ってきている。インターネット・コミュニケーションは、膨大な数の人間と機器が参加して、24時間、世界中で行われているので、その全容を捕えることは、殆ど不可能と言える。また、統計的手法に基づいてサンプルを選んで調べても、結果は、必ずしもその全体を適切に代表するものと断定することはできない可能性がある。インターネットに関する、インターネット上での調査結果は、あくまでも、調査の行われた特定の期間、あるいは特定の対象についてである。

Babel チームという情報関連の企業と団体との共同研究グループが行なった、「インターネットで、利用される言語についての研究」の報告(1997年6月)がある。調査方法を簡単に紹介する⁵⁾。

1) 無作為に選ばれた数字をIPアドレスとみなし、機器を選びだし、ICMP protocol によって、選ばれた機器が実際にそのアドレスに存在するかを判断するという方法で、インターネットの中から、調査対象となりうる6万の機器を特定した。

*IPアドレス = internet protocol address インターネットに接続している無数のコンピュータを識別するために、個々のコンピュータに付けられた番号。

*ICMP protocol = internet control message protocol ネットワークの混乱や、データ送信が不良の場合などのエラーの報告などを、データの発信者に伝える機能。

2) これらの機器が、インターネットのサーバーに接続しているHTTPサーバーのホストであるか否かを判断した。その結果、8千以上の機器が、HTTPのホストであることが、判明した。

*HTTP = Hypertext transfer protocol ハイパーテキストを送受信するため、WWWサーバーで使われる通信規約。

3) これらのホスト・コンピュータについて、使用されている言語に関する分析がなされた。分析調査の対象をホームページに限定し、それぞれからページを取り出し、HTML関連タグを取り除き、残りが500文字以上であれば、それを世界で最もよく使われている17の言語を識別できる自動言語識別ソフトで処理した。

*HTML = Hypertext mark-up language
インターネットのWWWページを作成するためのプログラミング言語

4) 3) の結果をチェックするために、調査対象のホームページの中からサンプルを、ブラウザを使って、実際に開いて、視覚的に、言語識別ソフトの結果と比較した。200近くのホームページがこのようにチェックされた。若干の欠陥はあるものの、言語識別ソフトの一般的な信頼性も確かめられた。

調査の結果、第2表にあるように、調査した3,239のホームページの82%強は、英語で書かれていた。同一言語に対して、2つの数値が並記してあるのは、エラーを考慮して、

統計的に修正を加えた数値と修正前の生の数値とである。

第2表に示された数値は、絶対的なものではない。調査対象になったサーバーのホームページのみの分析であり、英語によるホームページには、別の言語によるホームページが英語のホームページのhyperlinkの裏に隠れていることが、しばしばある。また、HTTPサーバーを見つける過程でも、エラーが起きる可能性はある。HTTPサーバーを見つける方法として、ICMPパケットのエコーを利用したが、パケットがなくなることがある。特に、地理的距離ではなく、ネット環境上の距離が離れているときにこのようなことが起こる。しかし、これらによるエラーは無視できる範

第2表 調査対象ホームページでの使用言語（頻度順）

順位	言語	ページ数	%(修正前)	%(修正後)
1	英語	2722	84.0	82.3
2	ドイツ語	147	4.5	4.0
3	日本語	101	3.1	1.6
4	フランス語	59	1.8	1.5
5	スペイン語	38	1.2	1.1
6	スウェーデン語	35	1.1	0.6
7	イタリア語	31	1.0	0.8
8	ポルトガル語	21	0.7	0.7
9	オランダ語	20	0.6	0.4
10	ノルウェー語	19	0.6	0.3
11	フィンランド語	14	0.4	0.3
12	チェコ語	11	0.3	0.3
13	デンマーク語	9	0.3	0.3
14	ロシア語	8	0.3	0.1
15	マレー語	4	0.1	0.1
	無し または不明(修正値)			5.6
合計		3239	100%	100%

Babelチームという、Alis Technologiesとthe Internet Societyとの共同研究チームによって行われた、インターネットで使用される言語の調査

困のものこの研究者たちは考えている。

現時点においては、第2表に示された結果から、「インターネットで使用されている言語の中で、英語が圧倒的の優位にあることが示されている」と言えるであろう。

インターネット・ユーザーの数の変動や性別、年齢別、インターネットの利用目的、利用頻度、ホスト・コンピュータ数の経年変化、地域や国別の相違や変動、インターネット・プロバイダー数の変動などに関する調査報告は多く見られるが、使用言語種に関する調査は、Babelチームの報告以外には、見出すことができなかった。

第2章 インターネットにおける英語優位の沿革

前章で示したように、英語は、公用語として使われている国々が地域的に全世界にわたっており、国際会議など多くの国際的場面で使われる言語であるだけでなく、インターネットにおける使用言語としても優位な地位にある。では、なぜ英語が、インターネットの優位言語となったのであろうか。この間に答えるためには、インターネットがどのように発達してきたかを、簡単に振り返ってみる必要がある。

1 インターネットの発達史

インターネットは、アメリカ合衆国で生まれたものである。同国の国防総省が1968年に開始した研究プログラムの成果である。当時の関心事は、当時、軍が使用していた中枢コンピュータに多数の端末が接続されている形の衛星型ネットワークでは、もし外敵によって、中枢コンピュータが破壊されると、指揮・命令系統が完全に崩壊してしまうのではな

いか、ということであった。そこで、国防総省の高等研究計画局に対して、広範な場所に配置されたコンピュータシステム間を、相互に連結する方法を見つけると言う課題が与えられた。

* 高等研究計画局=(略)ARPA = Advanced Research Projects Agency

* ここで開発された通信方式をアーパネット=(略)ARPANET(work) = ARPA computer networkと呼ぶ。

その結果考えられた解決策は、ルーティングシステムである。この方法によると、データは、小分けされ、その一つづつに、最終目的地を示すアドレスがつけられ、接続している複数のコンピュータ間のネットワークを通過して送られていく。この方式では、ネットワーク内の1つのルートがもし破壊されても、小分けされたデータは、別の、破壊されていないルートを通過して行くので、データは目的地へ無事に届く。このルーティングシステムは、1969年末に初めて使用された。

アーパネット(ARPANET)として知られているこのネットワークは、4つの大学(カリフォルニア大学ロスアンゼルス校、同大学サンタバーバラ校、スタンフォード大学、ユタ大学)を相互に連結した。その後、わずか2年以内に、このARPANETには、互いのコンピュータに電子メールでアクセスしたり電子掲示板で情報交換(今日のUsenetというnewsgroups)したりするサイトが40もできた。

アーパネットに繋がっているコンピュータ間のデータの流れを制御するソフトウェアは、TCP(Transmission Control Protocol)とIP(Internet Protocol)である。これらは、1970年代半ばに、一般に公開された。その結果、米国において、コンピュータネットワークの利

用が非常に増加することとなった。

1980年後半には、これら2つのソフトウェアは他の国々でも使用されるようになり、世界の情報通信システムの標準とされるようになったので、世界の異なる場所にあるコンピュータが互いに直接コミュニケーションすることが可能になった。この時期以後、個々のパソコンは、企業内や学内LAN (= Local Area Network 地域限定通信網) によって、接続されるようになり、更に、そのようなLANは、より広範な全国的な通信網に、そして、世界の通信網に接続されて行った。このようなネットワークが、ネットワーク間を繋ぐネットワークという意味でインターネット (the Internet) と呼ばれるようになったのは、この時期である。

その結果、1990年代半ばまでには、世界的規模でのパソコンの接続が可能となったのである。以後は、パソコンが家庭にも急速に普及し、インターネット・プロバイダーの数の増加、英語以外の言語に対応するブラウザや、完全とは言えないまでも英語から他言語への翻訳ソフトの出現などによって、インターネットの発展は留まることがない現状である。

2 英語とASCIIコード

前節で見たように、インターネットは米国で生まれただけでなく、その後およそ15年間は、米国以外の国では使われなかった。その時期には、インターネット・コミュニケーションで使用される文字を表わすための符号がASCIIコードであるということは、問題ではなかった。というのは、文字表示コードとして表わすことのできる文字種数が最大256種であっても、英語によるコミュニケーションに対応できたからであった。

*ASCII = American Standard Committee for Information Interchange アメリカ基準協会

*同協会が制定したデータ通信の符号体系をASCIIコードという。

インターネットは、初めは、アラビア語、中国語、ロシア語、ギリシャ語などのように、英語とは異なる文字表記体系を持つ言語に対応できなかった。その上、英語以外の言語で、文字表記にローマ字を使用する言語にとっても、ASCIIコードは不利であった。例えば、フランス語の (è) ス페인語の (ñ) ドイツ語の (ä) のような例にみられるように、アクセント符号のついた文字に対するコードをASCIIは用意していなかったのである。英国の貨幣単位を示すポンド記号 (£) さえもコードには含まれていなかったように、アメリカ英語にしか対応していなかったため、同じ英語とはいえ、イギリス英語でも、十分表現できるとは言えなかった。

英語以外の文字表記体系のための規格 (例 : MIME, UNICODE) は後に開発されたが、英語に対応するものに比べて、規格はより複雑であるため、作られるソフトウェアは動作時間がより長くなり、エラーの起きる危険性も高い。

インターネットの起源、初期の規格では文字表示に制約があったこと、更に、いろいろなサーチエンジンやブラウザは英語であったことなどから、英語がインターネットで優位を占めていたことが理解できる。

第3章 インターネットでの英語の優位はいつまで続くか (未来展望)

1 英語利用対母語利用

今日、インターネットで英語は優位を保っているが、英語圏以外の国々からのインターネットへの接続が増えるにつれて、他の言語の使用頻度も多くなってきている。英語圏以外でのインターネット利用は、英語による利用なのか、英語以外の言語による利用なのかを知る必要がある。残念ながら、すでに述べたように、使用言語に関する調査は紹介したもの以外に見つかっていない。間接的に、利用できる資料として、アジア諸国について、つぎのような調査報告がある⁶⁾。

この調査は、1994年1月から1995年7月の1年半の間にドメイン数がどのように変化したかを調べたもので、第3表はその結果を地域別に示したものである。1年半の間に、全世界のドメイン数は2.7倍に、アジアのドメイン数は2.8倍になっており、伸び率に大差はない。1994年1月から1995年1月までの1年間

のアジアの伸び率は、世界で下から2番目という低調さであった。しかし、1995年1月から7月までの6か月間の伸び率をみると、アジアは世界第2位の伸びを示している。この飛躍的な伸びは主として、日本、韓国、台湾、香港、シンガポールとタイ国の6カ国におけるものであると報告されている。

一方、本来英語によると考えられる北米のドメインと、オーストラリア、ニュージーランドを含む太平洋地域のドメインとの占める割合は、合計で全世界の70%を超え、1994年1月、1995年1月、1995年7月のいずれの時期の調査結果においても変化はない。これは、インターネットそのものが発展し、各地域で母語による利用が増えてきていても、世界語として、またインターネットで主に使用される言語としての英語の地位は当分は変わらないことを示唆しているようである。

第3表 インターネットの発展（地域別）

地 域	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
北 米	68.06	100	68.11	26	68.4	35
西ヨーロッパ	22.25	89	19.71	22	22.0	40
太 平 洋	4.58	70	3.19	25	3.8	31
ア ジ ア	3.28	87	2.84	19	3.5	51
東ヨーロッパ	0.80	132	1.06	40	1.00	45
ア フ リ カ	0.44	148	0.65	29	0.62	53
中 東	0.28	98	0.28	33	0.29	41
合 計	100	96	100	24	100	37

(1) 1994年1月 世界の中で占める割合 %

(2) 1994年1月～1995年1月 増加率 %

(3) 1995年1月 世界の中で占める割合 %

(4) 1994年第4半期 増加率 %

(5) 1995年7月 世界の中で占める割合 %

(6) 1995年7月までの6ヵ月間の増加率 %

“Internet Development in Asia” by Peng Hwa Ang, School of Communication Studies, Nanyang Technological University, Singapore & Chee Meng Loh, National Computer Board, Singapore より引用。コンサルタント会社 Network WizardsのMark Lottorの報告にもとづく資料。

Nua⁷⁾というインターネット関連企業は、過去2年間に発表された各種の調査を総合して推測したインターネット利用者の数を、1998年7月にインターネット上で発表している。インターネット利用調査には、いろいろな方法があり、またそれにもなう制約もあるので、得られた結果は、おおよその推測の域を出ないことを了解しておく必要があるが、この推計によると、世界でインターネットを利用している人口（オンライン人口）の総計は、成人と子供を含めて、1億3千万人で、その約54%の7千万人は、英語国のアメリカとカナダに在住している。

インターネット調査グループeMarketer⁸⁾は、Netscape, Yahoo!, Exciteなどが、翻訳版を提供するようになって、インターネットが本当の意味で多言語となってきたため、米国外でのインターネット利用者の数は1998年度末までに米国内の利用者の数を越えるであろうと予測している。また、同グループは、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、日本語、中国語、スカンジナビア語による利用が顕著な伸びを示していると報告している。

以上の調査結果からは、地域的な発展の速度の違いはあるものの、インターネットにおける英語の優位性は、しばらく続いて行くように思われる。しかし、逆の主張をする研究者もある。

Graddol(1997年)⁹⁾は、もし、アジアの経済が発展傾向を続け、インターネットの主な利用者層である中産階級の人口が増えれば、この地域でのインターネットの使用も増加する。これは、英語によるインターネット利用が相対的に減少することになる。従って、英語によるコンピュータ・コミュニケーションは、今後10年間に全体の40%に減少するであろうと書いている。

英語利用の割合が減少したとしても、最大の利点である国境をこえたコミュニケーションを可能にする道具としてのインターネットの役割を考えると、英語はインターネットにとってやはり最重要言語であると言わざるを得ない。

2 英語利用にたいする母語の影響

英語がインターネットの国際的な共通語であるということは、(1)インターネット利用者の多くにとって、英語は外国語であり、外国語である英語で発信する際に、母語のコミュニケーション・スタイルの影響を受ける可能性が考えられる。いろいろな言語を母語とする人々が、英語で発信するため、いろいろなタイプの英語がインターネット・コミュニケーションに入ってくるのが考えられる。また、(2)文書による通信と異なり、電子メールは話し言葉のような身近さから、文法、句読点、綴りなどの決まりや形式に縛られる割合が非常に低くなっていく。このことは、インターネット英語の新しい形式を生みだし、英語表現の変化を起しやすくするのはないかと考えられる。

文書による通常の通信(手紙)の英語と、電子メールの英語との間に、どのような相違が見られるかの例として、一つの電子メールの実例を検討する。但し、氏名とメール・アドレスは変えてある。

e-mailの例

Date: Thu, 7 May 1998 11:16:54 -0400 (EDT)
From: Mary Poppins <mpop@xxxxx.xxx>
Sender: mpop@xxxxx.xxx
To: flaminia@cs.kasei.ac.jp
Subject: Re: Action Guide for Girls' Education
Content-Type: TEXT/PLAIN; charset =

US-ASCII

Hello,

Thank you for your inquiry regarding the Action Guide for Girls' Education. We would like to put the Guide online, but have not yet had the time to do it.

..... (一部省略)

Best,

Mary Poppins

これは、e-mail で書かれたビジネスレターである。本文はビジネスレターの形式にのっとって書かれている。しかし、始めの挨拶と結びの部分がくだけた形になっている。すなわち Dear Ms. Miyamasu と手紙ではするところが、Hello となっており、結びは Best regards とするところが、Best とだけ書かれている。

このように、電子メールでは、すでに、電子メール特有な英語表現も見られるようになってきている。これが、英語そのものに影響を及ぼしているのか、インターネット以外の場で使用される英語にも変化は認められるのかなどについては、今後の研究課題である。

第1章～第3章：あとがき

英語は、その公用語話者の数から見ても、公用語として採用している国の地域的広がりから見ても、世界語といえる。

インターネットは、共通の言語を利用することによって、物理的距離の遠近を問わず、国境を越えたコミュニケーションを可能にしてくれる。インターネットの飛躍的な発展は、それが英語以外の言語に対応することが可能

になってきたためでもあるが、現在は、インターネット利用言語として、英語は優位にある。この状況は当然続くと思われる。

手軽に、頻繁に、会話感覚で利用される電子メールの英語には、特有な表現も見られるようになってきている。

また、英語を母語としない人々が、英語でインターネットに参加することが増大することによって、英語そのものにも、何らかの影響があるかもしれない。筆者らは、この点についても、今後関心を払っていきたいと考えている。

第1章～第3章：参考文献

注：

- 1) Malcolm McConnell. "Cry for Help on the Internet". *Reader's Digest* February, 1998 (pp. 66-71)
- 2) デイビッド・クリスタル著・風間喜代三・長谷川欣佑監訳. *言語学百科辞典* 大修館, 1992 (413頁)
- 3) 国際地学協会. *世界地図帖*. 1986(資料: 各国便覧)
- 4) 「国際コミュニケーションに使われる言語は何か?」
1998年9月6日閲覧
<http://www2.n-seiryu.ac.jp/TEACHER/kimura/Semi97/Maeda/1.html>
- 5) Babel Team. "Web Languages Hit Parade." June 1997
1998年6月10日閲覧
<http://www.isoc.org:8080/palmarens.htm/>
- 6) Peng Hwa Ang. and Chee Meng Loh. "Internet Development in Asia." 1998年6月10日閲覧
*Internet ConnectivityExperiences*1996
http://www.free.net:8000/Docs/inet96/h1/h1_1.htm
- 7) NUA Internet Surveys: Computerworld: "How Many Online?" 1998年7月閲覧
<http://www.nua.net/>
- 8) eMarketer: "Non-English Speakers Catch-Up." 1998年7月閲覧
<http://www.nua.net/>
- 9) Graddol, David. (1997). *The Future of English* London: British Council.
- * imidas.(1997) *A Dictionary of Katakana Words.* (イ

インターネット社会に対応.カタカナ語、欧文略語辞典.東京：集英社.

関連文献

Goodman, Sharon. and Gaddol, David.(1996).
Redesigning English: New Texts, New Identities.
London: Routledge.

第4章 インターネット英語の実際

はじめに

この章ではインターネット英語について簡単に述べる。これまでの英語とどこが違うのか、これからどのように変わっていくことが予想されるのかを、外国語としての英語を教えている教師の立場から解釈を試みる。英語圏からスタートしたインターネット上のコミュニケーションの特徴が他の言語にも及んでいるので、ここで述べる事は他の言語にも共通する部分も当然あると思う。そういうわけで、インターネットの背景になっている諸事情も含めたうえで、インターネット英語を考察してみたい。最初にインターネット上で使われる英語の特徴、傾向を述べ、次にインターネット上ではどのような文を書けばよいか、どのような文が好まれるかを、具体例も入れながら述べてみたい。

1 インターネット上で使われる英語の特徴、傾向

ここでは、インターネット英語に共通する特徴と傾向を述べる。基本的にインターネット英語は書き言葉であるが、今までの書き言葉と比べてどんな特徴があるのかも考察してみる。インターネット英語の特徴の分類に関しては、インターネット英語辞典（塩沢1998）を参考にした。

1.1 会話文と書き言葉の中間言語

現在、インターネットが一般の人に使われるようになって日も浅いこともあり、他のメディアでの既存の制約をかなり無視して、新たにインターネット特有の規則をユーザー自ら作り出しつつあるように見える。インターネット上で使用される英語も同様の過程を経て行くと思われるが、現在は過渡期にあるのかもしれないが、口語と文語の混ざり合った英語が主流になっている。インターネット上で使われる英語の下地はレターコミュニケーションではあるが、どちらかという、伝統的かつ正統派の書き言葉よりも話し言葉の英語に近くなっている。これは、ほとんど瞬時に（実際のところ数十秒から、数分かかってはいても）電子メールでのやりとりができるので、まるでその人の顔をみながら話している錯覚に落ち入り、おもわず“話しかけて”しまう傾向があるためであろう。

例：me too...going home...See you
Sunday???

1.1.1 全て大文字や小文字の文章が多い

インターネットという今までとは一風変わったメディアでは、全て大文字（Shoutingと呼ばれる）また逆に全て小文字の英文をよく見かける。これはコンピュータの入力の際、シフトキーを一つ押すのが面倒だからと思われる。また、用紙に印字された手紙文と違い、スペルのミスも多い。平均して、1メッセージに3ヶ所はスペルミスがあるとされている（Angell, 1994, p.83）。電子メールソフトによってはスペルチェックをしてくれるものも出てきてはいるが、大抵の人は急いで書いて読み返さずに出してしまうためである。親しい間柄の人に出す場合は、忙しい合間に一刻も早く出したかったのだらうと暗黙の了解をして大目にみることになるが、同一人物が仕事上やもっと正式に書く場合は、使用される言語も形式もきちんと正統派の手紙文形式に

そって（あるいはあまり逸脱しないで）書いているので、使い分けをしていることが分かる。

語学教師という立場から見ると、基本的な英語の文章の書き方をまだ学習していない英語学習者には、正式な書き言葉としての英語とインターネット英語の微妙な違いも、教えておく必要があるだろう。例えば、大文字だけの語句は、強調したいときによく使われるが、全て大文字でメッセージを書くのは、まるで大声で叫んでいるのと同じに解釈されること、読む人の立場からは、大文字、小文字が正しく混ざった文の方がずっと読みやすいこと、あまり通常の英語文から、形式も内容も逸脱していると、英語を理解していないと誤解されることなどである。

1.1.2 出だしと結びの言葉

インターネット、特に電子メールでは、通常の手紙文に比べて、簡単に、会話分に近い挨拶文がよく使用される。一般的には、形式的よりは主に親しみを込めた挨拶文が好まれている。時には、挨拶抜きで、すぐに本題に入ったりする。ただし、国民性によっては、もう少し正統派の挨拶を好むと言われている。例えば、アメリカに比べ、日本やヨーロッパでは正式な伝統的な挨拶文が好まれると言われている。これも、お互いにどのくらい親しいかで、変わってくる。筆者も、最初はHiよりはDear...と書いていたが、通信相手の様子を見て次第に挨拶文を変えたりしている。良く使われる挨拶文の例としては、Hello, Hi (first name), Dear...などがある。

同様に、結びの文（結辞）も簡単になっているし、省略文ですます場合もある。

例：Thanks, Regards, THX(Thanks)

TGIF(Thank God It's Friday)

ただし、上述の大文字、小文字の問題と同様に、基本的なレターコミュニケーションをマスターしていないと、正式なビジネス的な

メッセージと、もっとくだけたメッセージの区別が付かなくなる恐れはある。

1.2 簡潔さ

インターネット上で使用される英文は、通常の手紙文などに比べて短い。インターネット関連の本や資料にも、電子メールを出す時の心得として、段落は3つくらいまで、全部で10行くらい、1～2画面で読める長さ以内に押さえるよう勧めている。一日に何十通も、時には何百通もメールを受け取る人も多いので、短く簡潔な文の方が、早く確実に読まれる可能性が増すわけである。

インターネット上では、紙に印字された手紙文と違い、頻繁に発信が可能なので、一度にいくつもの情報を押し込む必要がない。そのため、一つの話題について議論しあい、それが済めば次の話題に移ることが多い。まさに書きながら会話をしているような感じになる。

例：[Hi,(First Name) Got the file.]

1.3 直接さ

忙しい現代人にぴったりのメディアであるインターネット上では直接的で明確な内容が重要視される。D. Angell(1994, p. 2)は、"E-mail empowers individuals by flattening out corporate and sociological hierarchies and allowing for more direct interactive communication." と、社会的な上下関係を省いた直接的なコミュニケーションがインターネット英語の強力な魅力であることを強調している。手紙文などと違い、文頭からメッセージの目的や主題を提示し、必要かつ時間があれば、その説明や例などを加えていく。しかしながら、やはり話術に長けている人が書く文は、簡潔で、直接的であっても、ぶしつけにならず、気配りを感じさせる内容になっている。

1.4 頻 繁 さ

インターネット上でのコミュニケーションは、相手との物理的、時間的距離を気にせずに行なえる。隣の部屋でも、外国でも、メールを出して数分後には返事が来ていたりする。したがって日に何回も送信を繰り返すこともできる。また、特にメーリングリストの場合、同一メッセージを何十人、何百人に一度に送ることもできる。個人でも、ニックネーム編集で受け取り人の住所を登録しておけばやはり何人にも送信ボタンを一回おすだけで簡単に送信できる。この便利さがメール交換の回数を多くし、交換の間の時間を短くするのに貢献している。いわゆる筆無精の人でも、電子メールだと、こまめに返事を書く人も多い。これはキーボードの前に座ったまま入力しそのままボタン一つで、簡単に気楽に送信できるからである。

語学教師の立場からも、電子メールを含むインターネットは便利で有意義なメディアである。学習者は英語で相手と（リストに参加している場合などは複数の相手と）コミュニケーションをはかるために、一生懸命考え、文章を練る。必要であれば辞書で調べ、それでも分からないときは、そのメッセージ画面にしながら、別のメールで教師に質問することが出来る。うまくいけばすぐに返事をもらい、自分のメッセージを完成させて相手に送信することが可能である。従来の紙に書くライティングの指導の場合、特に提出、コメント、再提出の間の時間の問題、意志の疎通がうまくいかなかったり、意見のズレを生じたり、その内に（時間がたってしまう）学生の興味が薄れてしまったりと数々の苦勞をしている教師にとって、インターネット上で実際に上記のような場面に遭遇したときは感動的でさえある。

1.5 ユーモア

英語圏の人々は日常の会話によく冗談を入

れるがその習慣をインターネット上のコミュニケーションにも持ち込み、ユーモアのある気の効いた文のやり取りに遭遇するチャンスが多い。これは、1対1の通信だけでなく、メーリングリストでもよく見かける。言葉じりをとらえたダジャレ(puns)やその国の文化特有の冗談もあり、その国以外の人には理解できないことも多々ある。国際間のコミュニケーションの際には、お互いに気をつけないと、意味が理解できなかったり、勘違いして誤解をまねいたりすることもある。

誤解をまねくのを防いだり、語調を和らげたり、これは冗談なんだよとほめかすために使われるものにsmileyとかemoticonと呼ばれる絵文字（感情表現マーカ、ニコニコマーク、フェイスマーク）がある。日本語の場合と違い、英語で送信するときは、顔を左に倒して見ると人の顔の表情に見える絵文字を使用しているのが特徴である。これは多分、英語圏で使われていた絵文字を日本では、顔を倒さずとも分かるように直したのではないかと思われる。

英語絵文字例：

:-) (Happy), :- (Sad), ;- (Feel like Crying), :-} (Grinning)

日本式絵文字例：

(^_^) (笑顔)、(*^_^*) ; (ごめんなさい)

1.6 攻 撃 性

何百人から何万人もの世界中からの参加者があるメーリングリスト上では、議論や反論をしあっているうちに最初の意図とは違った方向に行ってしまうたり、誤解が生じたりして、感情的、攻撃的な発言に発展してしまうことがよくある。世界中の語学教師が参加しているメーリングリストで、筆者も実際にそういうやり取りを見聞いた経験がある。その時は、議論好きで攻撃的な人がたまたまいるからぐらいに考えていたが、他のメーリングリストでも同様な場面によく遭遇するし、イ

ンターネット関連の書籍でもこの攻撃性がよく取り上げられている。

会話の場合、初対面でいきなり議論開始はあまりないし他の書き言葉によるメディアでは、時間のズレがあり、なかなか議論、反論、喧嘩には発展しえないが、インターネット上のコミュニケーションの場合、その即時性にもかかわらず、顔や声の表情、ジェスチャーなどのボディランゲージなどで補うことができない文字通信なので、誤解が生じてしまうことも多い。

英語は、日本語に比べて相手をののしる言葉 (swearing) が格段に多いと言われている (浅見, 1996, p. 96; Bryson, 1990, p. 214)。このことが関係しているのか、日本人が初めてインターネット上で展開する議論やフレームウォー (flaming, flame war; 無礼な非難合戦) に遭遇するとかなりショックを受けてしまうが、英語圏の人々は議論のための議論と割り切っており、かなり激しく応酬するのは当たり前で、あまり後々まで感情的に尾をひかない。ただし、度を越えた議論やののしりはやはり敬遠される。

攻撃性そのものは、議論を活発にさせる起爆剤の役目をはたしてくれるが、この攻撃性をインターネット英語の欠点としないためには、受信相手が誤解しないように、明瞭に書く必要がある。特に、国際間のコミュニケーションの際に生じる、文化的違いに気をつけた上で、活発な討論をするように工夫をし、メッセージを送る前に読み返して、不注意な内容のメールを送らないようにすべきである。簡単に送れるので、ついつい書き終えると送信ボタンを押してしまい、後で後悔してしまうことがあるので注意が必要である。

1.7 インターネット上のエチケット

(Netiquette)

国際コミュニケーションの場でもあるインターネットでは、上記のような攻撃性の問題

や、文化の違いでおきる誤解を極力さける必要がある。インターネットは個人が自由に、時間も国境も気にせずに、情報を検索したり世界中の人々と交信できる非常に便利なツールであり環境であるが、逆にインターネット全体を取り締まる機関がない。誰もが勝手にふるまい、無秩序な環境になってしまうのを防ぐためにできたのが、ネチケット (Net + etiquette) である。

一般的な了解としては、主に次のものがよくあげられる。(1) 他人を誹謗中傷しない。(2) 他人のプライバシーを侵さない。(3) 他人の著作権を侵害しない。(4) 虚偽の情報を流布しない。(5) 情報は共有し、独占しない (永綱, 1996, p. 51)。

ニュースグループやメーリングリストでは、マナーやルールに関して FAQ (Frequently Asked Questions) というファイルを作り、ホームページや電子メールで会員に公開して説明しているところが多い。

この他にも細かくはいろいろあるが、英語に関しては、差別用語を使わないようにすることが挙げられると思う。10年前頃から徐々に使われ始めている Politically Correct Vocabulary (非差別用語) は、インターネットのように上下関係や年齢、人種、男女の差別の存在しない環境では、必要かつ不可欠になりつつある。

例 : astronaut spaceman;
native American American Indian;
postal worker postman;
fire fighter fireman;
police officer policeman;
physically challenged, differently
abled, person with special needs, etc.
handicapped;
visually impaired, visually challenged
blind;
international student
foreign student;

non-Japanese, non-Americans, etc.
foreigner

く分かりやすい。
(Angell, 1994, p.38)

2 インターネット英語の書き方の具体例

次に、実際にどのように文が書かれているのか、あるいはどのようなことに気がつけたら、より良いコミュニケーションがはかれるのかを、具体例をいれながら考察してみる。

常套句 (clichés) はあまり使いすぎないように。

例 : each and every, matter of life and death, grind to a halt, far cry, etc. (Angell, 1994, p.40)

2.1 能動的な文

重要なことを簡潔に書くためには、生き生きとした、相手を惹き付ける文章を書く必要がある。抽象的よりも具体的な用語・文章を使うほうがインパクトがある。即時的なインターネット上では、能動的かつ簡略な文が好まれる。インターネット英語がどういう傾向にあるかを理解する一助として少し例を挙げてみたい。

冗語 (redundant words) はなるべく避ける。

例 : absolutely essential, actual experience, advance planning, end result, etc. (Angell, 1994, p.42)

あいまいな文より具体的な文が好まれる。

例 : Please send the information to me ASAP.

(あいまい)

Please send the Cheez Whiz report to me by Tuesday, July 19. (具体的)

(Angell, 1994, p.37)

これらの例からも分かるように、能動的な文は何もインターネット特有のものではなく、ビジネスの世界では、Business Letter Writing 関連の教科書や、会社などで社員向けに開かれる Writing and Editing Course などで教えている内容である。しかし、忙しい人々が利用しているインターネットはそれをもっと過激に追及する環境になっているように思う。

2.2 インターネット英語特有の表現

この他に、能動的な文、インパクトのある文を書くために工夫されているインターネット特有の表現もある。例えば、今のところ電子メールでは下線やイタリック体が使えない。それらを記号や文字で置き換える方法が考え出された。また、書き言葉を補う為の絵文字 (emoticons or smileys) や、入力時間やコンピュータ容量を短縮させるために考え出された省力語などがある。いくつかを下記に紹介する。

複雑な文より簡略な文にする。

例 : The bug is agnogenic.

(複雑で一般的でない)

The cause of the software problem is unknown. (簡単で一般的)

(Angell, 1994, p.37)

難しい語句よりも分かりやすいものが使われることが多い。誤解を避ける上でも有効である。

例 : aggregate よりは total, amorphous よりは shapeless, optimum よりは best, terminate よりは end のほうがより易し

下線、斜体の表現の仕方

例 : _My Birthday_ (下線の意味)、My *Mazuda* is brand new. (イタリック体 (斜体) の意味)

強調、困惑、うれしさ、興奮などを伝えたい時、？や！などの句読点を何度も入力したり、母音を必要以上に入れて強調したり、そこだけを大文字にする。

例：Bravo!!! (or BRAVO!!!!) Hurrah!!!
This is sooooo neat... can you believe it????? Nooooo! Nice, isn't it ????? someone SPECIAL I am SO SORRY to give ...

相手にインパクトを与えるためにわざと口語をそのまま表現する。

例：... cause(because)unless I am wrong, ...
if he has anything else to add... phew... ..
. people enjoy reading it... nice, eh,
partner???? Wow! Ah Hah! (なるほど) Ouch! (痛い) Ha, Ha (笑うとき)
Clear???

口語感情表現 (絵文字以外に気持ちを表す表現)

例：<g>(Grin) <s>(Sigh) <l>(Laugh)
Grin (にやっ)

省略語句 (一般の省略語 (例：dept., mfg., co., etc.) と違い、電子メールなどでよく使われる省略語句は大文字で書かれる。)

例：BOT (Back on Topic), BTW (By The Way), CU (See You), GIGX (Garbage In Garbage Out), IMHO (In My Humble Opinion), IMNSHO (In My Not So Humble Opinion), ROTFL (Rolling On The Floor Laughing), TTFN (Ta Ta For Now), TTYL (Talk To You Later)

ネットワーク用語 (Jargon. ネットワークの世界でしか通じない特別な意味をもった語句が多い。インターネットが浸透してきた最近はかなりの人が理解するようになってはいるが、その用語を知らない

人との間の誤解を避けるためにも、用語の多用は避けたほうが良い。)

例：post (リストに投稿する) snail mail (通常の郵便) keypal(keyboard + pen pal ネット上の文通相手) netters(ネットワーク利用者) online (ネットワークにつながっている) offline(ネットワークにつながっていない状態) netizen (ネットワーク上の市民、参加者) moderator (リストなどの責任者) listserv (メーリングリスト管理用のソフト) cyberspace (ネットワーク上の仮想空間)

最後に

以上述べたことは、英語教師の立場からインターネット英語を考察する時に見られる一般的な特徴、傾向であり、インターネット英語の全体を網羅してないことをお断りしておく。分野によっても使用される英語のタイプはかなり異なることだろうし、英語圏内だけの交信か、異なる言語を母語とした人々との国際間の交信かでも変わってくる。同じ英語圏内でも、文化が違う人同士の交信では、使用される言語も内容も微妙に異なってくるかも知れない。ましてインターネットが一般人に使用されるようになってまだ日が浅いわけであるので、これからいろんなルールや暗黙の了解が作り出されるだろうし、インターネットを取り巻く環境も使用言語 (国際語あるいは共通語である英語や母語) もどんどん変化していくのではないと思われる。

第4章：参考文献

- Angell, D. (1994). *The Elements of EMail Style: Communicate Effectively via Electronic Mail*. Reading, Mass.: Addison-Wesley Publishing Co.
- Bryson, B. (1990). *Mother Tongue: English & How It Got*

- That Way*. New York: Avon Books
- 浅見ベーターベン. (1996). *インターネットとe-mail* (世界に向けて英語で発信!). 東京:アルク.
- 塩沢 正/スコット・シェフェルバイン編.(1998). *インターネット英語表現辞典 (Guide to Internet English Expressions)*. 東京:大修館書店.
- 永網浩二、石塚美佳、澤木泰代.(1996). *そのまま使えるEメールの書き方・使い方 (Personal networking at the speed of light)* 東京:日本経済新聞社.

第4章：関連文献

- Lasarenko, J. (1997). *Wired for Learning Harness the*

- power of the Internet for education* Indianapolis, IN: Que Corporation.
- Warschauer, M. (1995). *E-Mail for English Teaching*. Alexandria, VA: Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.
- 朝尾幸次郎・斉藤典明編.(1996). *インターネットと英語教育*. 東京:大修館書店.
- アダムガフィン著 (富士ソフト訳・編). (1995). *誰でもわかるインターネット*. 東京:富士ソフトウエア.
- 松島秀行. (1994). *インターネットのことがわかる本*. 東京:日本実業出版社.
- 村井 純. (1998). *インターネット (次世代への扉)*. 東京:岩波新書.